

私は6年生、中学1年生、2年生と、何度も学校に行けなくなりそうになった。私は不登校がどれだけ辛いことか知っていた。学校に行けなくなることは、自分にとって人生が終わることと同じくらいで、もう二度とあんな辛い思いをしたくないと思い、嫌がる自分をひっぱたいてでも通い続けた。誰にも相談できず、自分を追いつめて、半分死んだような気分だった。

16歳女子

不登校になった。一瞬、楽になった。しかし、学校に行っていない自分に劣等感を感じ、無意識のうちに現実逃避をするようになった。

また、不登校になった。そしてまた、無意識に現実逃避をした。自分とはまったく正反対の自分を思い浮かべた。自分はそうだと思い込もうとした。無理だった。現実の自分は正直にそこに居た。嘘の自分では隠せないほど、大きく存在していた。現実の自分を見るたびに辛くて悲しくて、死にたくなった。

今日 私たちのために
幼子イエスがお生まれになった



生徒共同制作<スポーツフェスタ 2015 パネル>

2015年12月25日

聖母の小さな学校
梅澤 秀明
梅澤 良子

この繰り返しをしている自分に気づいた。そして、現実の自分を何もいすっからかんの（学校に行くこと、外に出ること、友達、勉強とすべてなくなった）自分を見ることができた。不思議と安心感があつた。生きていけると思った。すっからかんになった自分を埋めるのに、何かにすがるのでなく、身近にある小さなことを大切にすることが積み重なって、力になっていくことを身を持って知った。

「不登校の自分を見る。」「私のありのままを見る。」自分を見つめる・・・このことを私たちは最も大切にしています。今の自分を見つめ、親しく付き合ってみると、「学校に行けない」とか、「～ができない」とか、「劣っている」というような表面的な部分だけでなく、それらを超えた自分の核になるものに触れることがあります。この生徒も自分の核になるものに触れ、生きていきたいと思えるようになりました。「学校に行けるようになったから・・・」「何かができるようになったから・・・」生きていけると思ったのではありません。自分の内なる真理に触れたからです。主が触れてくださったからです。

クリスマスおめでとうございます。
どうぞ、私たちのために祈りください。